

明治期の読書論における〈空想〉の排除と包摂

—お伽噺論を中心として—

目 黒 強

1. 問題の所在

2001年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行されて以降、全国各地で子どもの読書活動が推進される一方で、青少年健全育成条例において有害図書類の規制が強化されるなど、読書活動の推進と有害図書類の規制は軌を一にしている。ここで注目されるのは、前者では読書を通じた想像力の育成が謳われ、後者では有害図書類による性的感情などの妄想の助長が警戒されているように、〈空想〉の扱いが対照的な点である。

このような読書観は、明治期になって形成された歴史的産物である。高橋(1992)によれば、明治期における〈小説〉の社会的地位は低く、「俗悪メディア」から「教育的メディア」へとというまなざしの転換が生じたのは明治40年頃であり、目黒(2013)によれば、そのような転換は訓令第1号「学生生徒ノ風紀振肅ニ関スル件」(明治39年)をはじめとした課外読み物の統制と共起しているという。しかしながら、いずれの先行研究においても、読書論における〈空想〉の位相については取り立てて検討されていない。

そこで本稿では、明治期の読書論における〈空想〉の排除と包摂をめぐるポリティクスの検討を通して、「子どもとファンタジー」の歴史的関係を明らかにしたい。

2. 読書論における〈空想〉の排除

(1) 稗史小説論

野口(1996)によれば、「稗史小説」とは、古代中国の下級官吏(稗官)が収集した巷間の風聞等を指し、正史とは区別されていたという。取るに足りない言説を原義としながらも、やがて、白話小説などの虚構を意味するようになる。日本においても、近世以降、儒学が官学となり、稗史小説観が受け継がれ、四書五経などを学ぶ士君子の文学とは差別化され、虚構に過ぎない戯作などの稗史小説は婦女童蒙の玩具として蔑視されていた。

明治期の稗史小説論として人口に膾炙したのが、中村正直によって翻訳されたス邁爾ス(サミュエル・スマイルズ)『西國立志編 原名自助論』(明治3年~4年)である。第11編24の「稗官小説ノ害」という章では、「稗官小説ハ、人ノ戯笑ニ供シ、ソノ心志ヲ蕩散スルモノニシテ、教養ノ事ヲ穢スコト、コレヨリ甚シキハナシ。」⁽⁴⁾のように、年少者の勉強立身にとって有害であるとされていた。三川(2010a)によれば、「事実とはかけ離れた虚構」である点が「稗官小説ノ害」の根拠となっていたという。

翻訳書であるにもかかわらず、『西國立志編』に儒教的文学観が認められるのは、「稗官小説」という訳語の選択からもうかがえるように、訳者である中村の思想が反映されているからである。三川(2010b)によれば、「Self-Help が novel の文芸としての価値を全面的には否定しておらず、程度をわきまえた上での娯楽としての読書を容認していたのに対し、『西國立志編』では、そのようなニュアンスが翻訳の過程で消し去られ、専ら「小説」の害のみが強調された形となっている」という。洋学者であると同時に儒学者でもあった中村は「儒教的な枠組みで西洋文化を受け入れようとした」(三川,2010a)のである。

このような稗史小説観の伝統のもとでは、まさしく虚構の産物である〈お伽噺〉は排除される傾向にあった。

一、迷信。こゝに、吾人が迷信と称するものは、宇宙間に存在する無生物や動物、超自然的魔力を信ずる謬見を指すものなり。(略)一、空想。(略)小児の想像は、野蛮人の想像の如く、猴蟹合戦的想像なり。換言すれば、大に空想を混ざる想像なり。智力の根源となるべき想像作用は、元より空想にあらず、着実なる想像をいふなり。(略)かゝる野蛮時代的想像材料

を以て奨励するは、或は空想に耽らしむるにはあらざるか。

引用したのは、鈴木治太郎「童話難」(『児童研究』3巻8号、明治34年2月3日)である。「童話」が批判されたのは、「迷信」と「空想」のいずれもが事実性に反していたからであろう。なお、「童話」という用語であるが、木村小舟『少年文学史明治篇』下巻(童話春秋社、昭和17年)によれば、当時は「同じく昔物語、或は伝説口碑の類も、これを文学的に取扱ふ時は、お伽噺といひ、それが教育的に描かれた場合には、お伽噺といはずして童話」と称していたという(63頁)。「童話難」でも、「童話」は昔話等を指している。

これらの争点が集約されているのが擬人化であった。木下遂吉は「童話につきて」(『教育時論』680号、明治37年3月15日)で、「有生物を以て、無生物となし、現実界を以て想像界に混じ、又人生と自然とに対する関係を無視して、事実を誤解せしむること等其欠点少しとせず」と批判し、「要するに、荒誕にして変幻奇怪なるものは、童話の資格なしと云ふべし」と結論付けている。「荒誕にして変幻奇怪なるもの」という虚構性が擬人化批判を惹起したのだといえる。

明治期を代表する児童文学作家である巖谷小波は数多くの〈お伽噺〉を創作したが、それらは「動植物及び無機物界の万象を主客として取扱へる無邪気軽妙のお伽噺」であった(木村小舟『少年文学史明治篇』別巻、童話春秋社、昭和18年、249頁)。小波の〈お伽噺〉は、お伽噺批判派が指摘していた特徴を有していたのである。

(2) 近代小説論

「近代小説」とは、坪内逍遙の『小説神髓』(松月堂、明治18～19年)がいうところの「ノベル」(novel)を指す。「ノベル」は「世の人情と風俗をば写すを以て主脳となし、平常世間にあるべきやうなる事柄をもて材料として而して趣向を設くるもの」とされ、「趣向を荒唐無稽の事物に取りて、奇怪の百出もて篇をなし、尋常世界に見はれたる事物の道理に矛盾するを敢て顧みざるもの」である「ローマンス」(romance)とは差別化された(27頁)⁽²⁾。「ノベル」の眼目は同時代の普通の人びとの「世態人情」を写実することであり、戯作のよう

な稗史小説は「ローマンス」として排除されたのである。

それでは、近代小説観のもとでは、〈空想〉はどのように位置付けられていたのだろうか。逍遙は「中学年齢の男女に小説を読みしむるの可否に関して教員某に答ふる書」(『教育学術界』1巻4号、明治32年2月3日)で、「政治小説」である東海散士『佳人之奇遇』(明治18～明治30年)について、「空想を煽動し、実感を挑発」することから中学生に読ませるべきではないと主張していた。逍遙以外では、自然主義作家として活躍した田山花袋が『小説作法』(博文館、明治42年)で、「小説を書くに就いて、可成想像を排するを第一とするのは、私の主張である」と述べている(149頁)。花袋にとって「想像」は科学的方法を脅かすものであった。

ここで注目されるのは、「本来お伽噺なるものわ、どれも多少の怪奇気分を含まぬのわ無い」という立場から、巖谷小波が『小波お伽全集』第1巻(千里閣、昭和3年)で自らの〈お伽噺〉を「怪奇篇」に収録している点である。当時のターミノロジーからして、小波は〈お伽噺〉を「ローマンス」として捉えていたといえる。中村(1990)が指摘しているように、逍遙が排除した「ローマンス」を継承したのが小波であったのである。

(3) 有害図書論

写実主義および自然主義小説の流行に伴い、台頭してきたのが有害図書観である。本稿では、学生風紀問題⁽³⁾を背景的要因としながら、課外読み物の規制が社会問題化された局面を捉えて「有害図書観」と呼んでいる。なお、近代小説が有害視されたのは、「世態人情」を写実するという方法論にあった。稗史小説観のもとでは、〈小説〉は虚構に過ぎず、現実には及ぼす影響は軽視される傾向にあったが、近代小説の台頭に伴い、〈小説〉は現実を映し出すが故に危険なメディアとして警戒されるようになったのだと考えられる。

課外読み物規制の嚆矢として注目されるのが、牧野伸顕文部大臣による訓令第一号「学生生徒ノ風紀振肅ニ関スル件」(『官報』6882号、明治39年6月9日)である。

同訓令では、「修学中ノ者ニシテ或ハ小成ニ安シ奢侈ニ流レ或ハ空想ニ煩悶シテ処世ノ本務ヲ閑却スルモノアリ甚シキハ放縦不靡ニシテ操行ヲ紊リ恬ト

シテ恥チサル者ナキニアラス」という現状認識のもと、「陋劣」の「情態」を描いたような自然主義小説などを「禁遏」し、「有益ト認ムルモノ」を「勸奨」した。ここで注目されるのは、「空想」に「煩悶」することが警戒されていた点である。

ここでいう「煩悶」とは、第一高等学校の藤村操が明治36年に華嚴の瀧で「煩悶」により自殺したことを踏まえていると考えられる。「吾等は青年の精神界を調査して彼等が小説稗史の為に種々の誘惑を受けて苦悶せることを知り。(略)さなきだに燃え易き青年の情熱に油するが如き所謂文派の教育は人の子を焚死せしむる恐あらずや(無署名「文弱に流れんよりは寧ろ武強たれ」『児童研究』6巻10号、明治36年10月25日)のように、〈小説〉は青少年を「誘惑」するメディアとして有害視されていたのである。

牧野の後任として文部大臣に就任し、明治44年に通俗教育調査委員会官制と文藝委員会官制を制定した小松原英太郎もまた、『小松原文相 教育論』(二松堂書店、明治44年)で、青年が自然主義小説に「接触」することを禁止すべきであると述べていた。

同書で注目されるのは、「唯青年が之(理想、引用者注)に熱中して漫然空想を逞ふし、幼稚な不完全な理想を描いて之に執着するに至ては、其弊ありて益なきことを警告せねばならぬのである」(257頁)のように、「空想」が青年の「理想」を空転させるものとして警戒されていた点である。

牧野および小松原が主に想定していたのは自然主義小説であったが、〈お伽噺〉も同列に扱われることが少なくなかった。たとえば、医学者の富士川游は「小説が児童の精神に及ぼす害」(『児童研究』12巻2号、明治41年8月25日)で、次のように述べている。

小説といふは、広き意味にて、所謂稗史小説より御伽話、新聞の三面記事に至るまでを指すものにて、其文学上の価値等は措て論せず、ここには単にその弊害のみを挙げれば、之等の小説は、暗示(Suggestion)の作用をなし、自殺、犯罪、其他反社会所為の多くを生ずること第一なり、これ殊に精神変性の児童に然りとす。近時青年学生の自殺、不良少年の跋扈等は新聞記事を見ての模倣によるもの多かるべし。第二には架空の叙述のた

めに、児童をして虚偽に慣れしめ、又は知識に錯誤を致さしむ、(略) 故に架空小説の如きは此点に於て害あるや大なり。

「小説」に「御伽噺」が含まれているように、〈お伽噺〉もまた、有害図書として排除されるリスクを有していたのである。

3. 読書論における〈空想〉の包摂

(1) ヘルバルト学派の童話論

中山(2009:12)によれば、「ヘルバルト学派とは、ヨハン・フリードリヒ・ヘルバルト(略)の教育哲学、教育心理学にもとづく教育学の一派で、十九世紀後半において、欧米と日本などで隆盛を極めた」もので、「メルヒェンを用いた第一学年向けの教育を系統的に提唱したのはトゥイスコン・ツィラー(略)で、それを継承したのがヴィルヘルム・ライン(略)等」であったという。

幼児教育界に「童話」を導入した松本孝次郎は「幼稚園に於ける童話に就て」(『児童研究』5巻6号、明治35年8月5日)で、「子供の想像力を養つて往つて大に同情の発達をさせ道德上の真理といふものを覚え込ませるといふことがこれが童話の直接の目的」であると述べ、「童話」による「想像力」の育成を主張している。「童話」の教育的価値は、ヘルバルト学派によって見出されたのである。なお、ネガティブなイメージを喚起する「空想」に替えて、「想像」という語を用いたのだと思われる。

ここで留意すべきは、「童話」を導入するにあたっては、高島平三郎「童話ニ就テ」(『児童研究』13巻3号、明治42年9月25日)のような慎重な態度が認められた点である。

反対論者ノ主トシテ論ズル点ハ、(一) 童話ハ児童ノ空想ヲ刺激スルコト過度ニシテ児童ヲシテ現実ヲ軽視セシムル虞アリトスルナリ。此ノ虞ハ決シテ杞憂ニアラズ。若シ事実物ニ由ル直観の教授ヲ怠リテ唯童話ヲ語り聞カシムルコトニノミ偏セバ生長ノ後ハ小説戯曲ノ如キ空想的仮作談ヲ喜び社会ノ現実的方面ヲ厭フニ至ルベシ。

「童話ハ人文的材料中最モ児童ニ密接セルモノナレバ之ヲ幼児ノ教材トシテ採用スルハ最モ適当ナルコト」(『児童研究』13巻2号、明治42年8月25日)のように、高島はヘルバルト学派的な童話観の持ち主であった。にもかかわらず、「小説戯曲ノ如キ空想的仮作談」による悪感化を懸念しているのである。このような態度は、「童話」を導入する社会的合意が形成されていなかったことを示唆している。

さらに注目されるのは、「事実実物ニ由ル直観的教授ヲ怠リテ唯童話ヲ語り聞カシムル」というくだりである。後藤ちとせ「子供と談話」(『婦人と子ども』9巻5号、明治42年5月5日)もまた、「動植物を中心とした童話訓話御伽噺等には之等に関する庶物話を伴はしむること」のように取り扱いに注意を呼びかけていた。擬人化されたキャラクターが登場する「童話」等については「事実実物」を伴わせることが奨励されていたのである。ペスタロッチの実物教授を踏まえているのだろうが、「童話」が喚起する〈空想〉を抑制することによって「反対論者」の批判を回避する意図がうかがえる。

(2) 文学者のお伽噺論

一方、文学者のなかには、〈空想〉に文学的価値を認めていた者が見受けられる。

冒険小説の翻訳家として活躍していた櫻井鷗村は「幼年文学と漣山人」(『女学雑誌』427号、明治29年10月10日)で、擬人化を肯定的に評価している。

もと小児が心には、(略)禽獣、蟲魚、草木に対しても、人間らしき感覚を有するものと、妄想して、格別怪しともなさず、その大なる想像力によりて却て目に触るゝ万物を人化して、これと対話する真似して喜ぶが如きことあり。漣山人(小波、引用者注)は巧みに此妙処を捉ふるものなり、これ則ち其御伽譚に成功するの第一要件たり。

『太陽』や『中学世界』(ともに、博文館)などで健筆を揮った大町桂月も「少年文学に就いて」(『太陽』9巻6号、明治36年6月1日)で、「人事をとびは

なれて、空想を逞しうし、変幻奇怪なるを以て、お伽噺の本色とせざるべからず。かくて、児童の趣味を啓発し、想像力を養ふべき也」のように、「ローマンス」として小波の〈お伽噺〉を評価していた。

それでは、巖谷小波はどのようなお伽噺観を有していたのだろうか。小波のお伽噺論の特徴として挙げられるのが「空想」を「実行」の基盤として位置付けている点である。

又穴の穴の狭い先生方は、子供の空想を助長すると云つて、此種の読物(「お伽噺類」、引用者注)を嫌ふ様だが、此等も一知半解の迂論、所謂の道学先生の鼻元思案で、実に臍茶の至である。／空想！ 空想が何故悪いだらう、何ぞ知らんこの空想がやがて理想となり、果は実行を促す基となる(略)お伽噺で龍宮に遊んだ愉快は、他日の海底旅行を企てしめ、或は北極探検を思ひ立たせる、此皆空想の賜では無いか。

「嘘の価値」(『婦人と子ども』6巻8号、明治39年8月5日)からの引用であるが、空想批判に対して真っ向から反論している。

ヘルバート学派との相違点がうかがえるのは、「お伽噺を読ませる上の注意」(『婦人と子ども』9巻4号、明治42年4月5日)である。同記事によれば、小波にとって、「お伽噺の第一の目的は児童に面白く読ませる」ことにあった⁽⁴⁾。中山(2009:185)が指摘するように、小波は「ヘルバート学派教育学の「材料」としてのお伽噺に対し、文学としてのお伽噺を目指していた」のである。

最後に、小波の「催眠太郎」という作品の検討を通して、小波のお伽噺論がどのように具現化しているのかについて明らかにしたい。同作は『少年世界』の18巻(明治45年／大正1年)に6回に亘って掲載された「お伽小説」である⁽⁵⁾。勉強ができない太郎という少年が、母親に心配をかけたくない一心から催眠術を操る仙人に弟子入りし、修行の成果もあり、いじめっ子も仲良くなり、先生との関係も改善されるという作品だ。

(飛蝗を、引用者注) 捉へて見ると、また思い出した事がある。それは日外のお伽噺の本に、可愛らしい子供が、飛蝗の背に跨つて、空中旅行をす

る画のあつた事だ。(略) その画が今又目の前に浮ぶと、／「さうだ、一番物は試し、これに術をかけてやらう。」／と、太郎はその飛蝗に向ひ、「之に大鷲の力を与へ度い。」「この飛蝗が大鷲になる。」「この飛蝗が大鷲になった。」と、希望から信頼になり、信頼から遂に確信に移ると、不思議や今までの小飛蝗は、太郎の掌からヒラリと降りたが、忽ち五六尺の大飛蝗になつて、太郎の前に背を向けた。(18巻14号、大正1年10月1日)

引用したのは、催眠術を飛蝗にかけて、大鷲のような大飛蝗に変化させる場面である。「お伽噺」で読んだ「空中旅行」する「画」をもとに「空想」をふくらませるなど、太郎は「空想」を「実行」に移しており、小波のお伽噺論が体現されている。

このような太郎の振る舞いは、「お伽噺の本」の「空想」に感化されていることといい、「催眠術」に傾倒していることといい⁶⁾、課外読み物を規制する立場からすれば非常に危ういものであったと考えられる。小波の〈お伽噺〉は、「空想」が過剰であるという点で、有害図書として排除されかねない性質を抱え込んでいたのである。

4. 考察

以上の検討を通して得られた知見は、以下の四点である。

一つ目は、明治期の読書論では、〈空想〉が排除される傾向にあったという点である。「空想」という語は、現在でいうところの想像力を中核としながらも、「迷信」・「理想」などのような拡がりをも有しており、「扇動」・「煩悶」・「模倣」などと結び付き、青少年に悪影響を及ぼす概念として機能していた。

二つ目は、巖谷小波の〈お伽噺〉は、婦女童蒙の玩具として蔑視され、近代小説とは差異化された「ローマンス」であったという点である。このようなジャンル特性こそがお伽噺批判を惹起したのだと考えられる。

三つ目は、ヘルバルト学派の童話論と文学者のお伽噺論が、読書を通して想像力を育成するという現在の読書観の歴史的源泉であったという点である。ただし、文学者のお伽噺論は、ヘルバルト学派とは違って、〈空想〉の文学的価

値を認めていたため、その反社会的な作用を胚胎していた。

四つ目は、〈空想〉が向社会的にも反社会的にも作用しうる両義的なカテゴリーであるという点である。明治期における読書教育論と有害図書規制、現代における子どもの読書活動推進運動と青少年健全育成条例の制定が表裏一体の関係にあるのは、良書の推奨が悪書の排除を伴うという選書における構造的問題であるとともに、〈空想〉が上述した両義性を有していたことに起因すると考えられる。

注

- (1)『西國立志編』からの引用は「木平謙一郎明治4年新刻の後刷」を公開している早稲田大学古典籍総合データベースを参照したが、合略仮名などの表記に手を加えた。
- (2)引用は、岩波文庫2010年改版に拠る。
- (3)学生風紀問題は「学生の乱暴狼藉、学校紛擾、政治活動への熱中などの「社会的逸脱」から、服装の乱れや喫煙飲酒などのこまごまとした生活態度までを問題化し、批判する一連の言説群」で(澁谷,2013:207)、明治中期の教育界を席卷した社会問題である。
- (4)ただし、小波は「メルヘンに就て」(『太陽』4巻10号、明治31年5月5日)では、「メルヘンとしては、必しも道德的倫理的の加味を要せず、寧ろ無意味非寓意の中に、更に大なる点可有之」としながらも、「必しも寓意、教訓の筆法を、絶対的に、排斥する者には無之、時として之を用ふる」と述べていた。「教訓」に対して「娯楽」を上位に置こうとしながらも、そのような姿勢を貫徹できなかった点には注意が要される。
- (5)「お伽小説」と「お伽噺」の断続については、目黒(2010)を参照されたい。
- (6)一柳(1997)によれば、明治43年から44年にかけての千里眼事件を契機に、催眠術は科学的なものではなく、「いかがわしさ」のメタファーとして機能するようになるという。

文献

- 一柳廣高(1997)『催眠術の日本近代』青弓社
澁谷知美(2013)『立身出世と下半身』洛北出版
高橋一郎(1992)「明治期における「小説」イメージの転換」『思想』812号
中川淳子(2009)『グリムのメルヘンと明治期教育学』臨川書店
中村哲也(1990)「近代日本における児童文学生成期の諸相」『児童文学研究』22号
野口武彦(1996)『一語の辞典 小説』三省堂
三川智央(2010a)『西國立志編』と明治初期の「小説」観(Ⅰ) 金沢大学大学院人間社会環境研究編『人間社会環境研究』19号
三川智央(2010b)『西國立志編』と明治初期の「小説」観(Ⅱ) 金沢大学大学院人間社会環境研究編『人間社会環境研究』20号
目黒強(2010)『少年世界』における「お伽小説」にみる「小説」の位相『国際児童文学館紀要』23号
目黒強(2013)「教育雑誌における教育的メディアとしての児童文学の発見」日本児童文学学会編『児童文学研究』46号
早稲田大学古典籍総合データベース http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko11/bunko11_a1466/(2017年6月26日閲覧)